

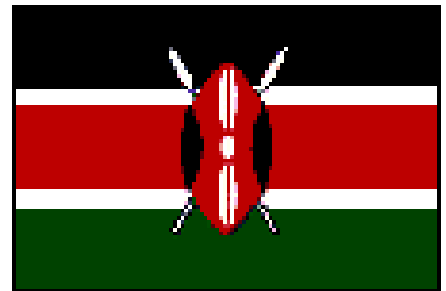
ケニア共和国



【国名】

●ケニアという国名の由来については諸説あるが、ケニア山（注）に由来すると言われていている。

（注）現地の人々が「キリニャガ（神の山）」と呼んだ山を、ヨーロッパ人が「ケニア山」と名付けたと言われている。



【国名】

●国旗の黒はケニア人を、赤は独立闘争のために流した血を、緑は森林と果てしなく続くサバンナを、白は平和を、中央の槍と盾は英軍からの独立闘争の際に使用した槍と盾を象徴。

【歴史】

●紀元前 2000 年頃, アフリカ北部のクシティック系民族が東アフリカ地域に移住。1 世紀頃までには季節風を利用してアラブ商人が頻繁に訪れるようになった。アラブ商人との交易では, 東アフリカから奴隷, 象牙, サイの角, 亀の甲羅, 手工業製品等が, アラビア半島・湾岸諸国から槍, 短刀, ガラス製品, 葡萄酒, 麦等が輸出された。

●1498 年以降, ポルトガル人が訪れるようになると, 東アフリカ海岸地域におけるイスラム勢力の支配力が低下し, モンバサの港は極東に向かうポルトガル船のための重要な拠点になった。17 世紀にはオマーンとポルトガルが攻防を繰り返した。18 世紀にはオマーンの影響力が強まり, 奴隷貿易や象牙貿易が活発に行われた。



●19世紀に欧米列強による進出が進む中、英国が優勢となり 1884～1885年のベルリン会議を経て英領東アフリカが誕生。1902年、現在のケニア全域が英国の保護領となり、1920年には直轄植民地となった。第二次世界大戦後、1952年にケニアとち自由軍が植民地政府に対する独立闘争（マウマウ団の乱）を起こし、この反乱を契機に独立の機運が高まり、1963年に英国から独立した。翌1964年に共和制へ移行し、ケニア共和国が誕生した。

【スワヒリ語】

●ケニアの公用語は英語，国語はスワヒリ語。各部族でも異なる言語を有する。

●スワヒリ語は，タンザニアを中心に，ケニア，ウガンダ，ブルンジ，ルワンダ，コンゴ（民），コモロ，モザンビークで使用され，スワヒリ語人口は1億人を超える（アフリカでは最も使用人口が多い言語）。

●スワヒリ語には沢山の諺があることで有名。

（例：Milima haikutani, lakini binadamu fukutana（山と山が出会うことはないが，人間というものは常に出会うものだ。→「再会祈念」の意。））

【長距離陸上選手】

●ケニアは中・長距離陸上選手の宝庫として有名。特に、マラソンは近年常に世界のトップレベルにあり、圧倒的強さと層の厚さを誇っている（世界歴代 10 傑のうち、8 人がケニア人）。

●リオデジャネイロ・オリンピックでは、ジェミマ・スムゴング（女子マラソン）及びエリウド・キプチョゲ（男子マラソン）が金メダルを獲得。なお、ケニアの同オリンピックでのメダル獲得数は 13（金 6，銀 6，銅 1）。

●北京オリンピック男子マラソンではサムエル・ワンジル（仙台育英高卒）が金メダルを獲得。最近では、2014 年 9 月のベルリンマラソンでデニス・キメット選手が世界新記録（当時）を樹立した。

●その他，ダグラス・ワキウリ（ソウル五輪マラソン銀）やエリック・ワイナイナ（アトランタ五輪マラソン銅，シドニー五輪マラソン銀）など，日本に留学して開花したケニア人ランナーも多い。

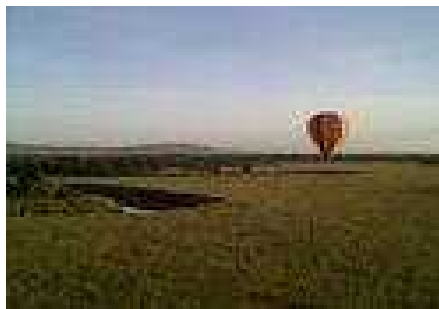
【東京 2020 オリンピック・パラリンピック事前合宿】

2017 年 8 月 23 日，ケニアスポーツ文化芸術省，久留米市，福岡県の 3 者間で東京 2020 オリンピック・パラリンピック事前合宿に関する基本合意書に署名。

【大自然】

- ケニア山は、アフリカ大陸で2番目に高く、標高は5,199m。キクユ族等の人々にとっては、神が住む神聖な山とされている。
- ケニアには59カ所の国立公園、国立保護区、動物保護区がある。中でも、タンザニアとの国境に位置するマサイマラ国立保護区は、ケニアでは野生動物が最も多く、総面積は大阪府に匹敵する。また、ナイロビの南にあるアンポセリ国立公園は、アーネスト・ヘミングウェイが「キリマンジャロの雪」を執筆した場所として有名。
- カレン・ブリクセンの「アウト・オブ・アフリカ」やジョイ・アダムソンの「野生のエルザ」等、ケニアを舞台とした文学作品は多い。映画やテレビ番組のロケ地としても、その魅力的な大自然が頻繁に使われている。

●映画では、2009 年末に公開された山崎豊子原作の「沈まぬ太陽」の制作（主演：渡辺謙）が、ナイロビ市内やマサイマラをロケ地として行われ、2015 年 3 月には、さだまさしの歌「風に立つライオン」のモデルとなった長崎大学の柴田医師（感染症研究）のケニアでの活躍を描く同名の映画が公開された。



【紅茶】

●ケニアは世界有数の紅茶生産国として知られ、その生産量は世界第3位、世界の茶の輸出量の20%以上を占めるといわれる。高地（1500m~2700m）の沖積土で栽培され、年間を通じて降雨量が均一なため高品質な茶ができる。

●1903年に、G. W. L. ケインによってインドから初めて茶（*Camellia sinensis*）の苗木がケニアに持ち込まれ、近郊に植えられたのが最初。このときの茶の木の一部が大木に成長し、現在のユニリーバ社マブルーキー茶農園の名物となっている。ケニアで茶の商業栽培が始まったのは1924年。



【花】

●ケニアの花卉園芸産業は、1990年以來大幅に成長。農業部門において、花卉栽培は紅茶に次ぐ第2位の外貨獲得産業（年間2億5000万ドル強）であり、5万人～7万人を直接雇用し、150万人強を間接的に雇用している。

●ケニアの花は、赤道直下で年間を通じて温暖で日照量にも恵まれた高冷地で栽培され、昼夜の温度差も大きいことから花の発色もよく、茎がしっかりしているのが特徴。輸出される花の74%をバラが占め、カーネーションがこれに次ぐ。

●ケニアで栽培される花の3分の2がオランダ向け。オランダの卸売業者が買い入れた花が米国や日本といった遠い市場へ再輸出されている。日本のバラの輸入先のうち、ケニアは第一位で、全体輸入量2,500トン及び輸入額22億円のうちの1,000トン、10億円分にあたる（2016年、農林水産省）

【コーヒー】

●ケニアで生産されるコーヒー豆はアラビカ種。標高 1,400~2,000 メートルの高地にある火山性土壌で、平均気温 19℃、年間降雨量 1,000 ミリ未満といった好条件の下で育てられるため、高品質のコーヒー豆が生産される。

●主な輸出先は、ドイツ、スウェーデン、ベルギー。コーヒー栽培は、主として、協同組合に組織される小規模農家によって行われ（60%）、残りの40%は大規模農家によるもの。



【人類の歴史】

●1984年、人類学者リチャード・リーキーが、ケニアのトゥルカナ湖でおよそ160万年前の化石人骨（ホモ・エルガステル）を発掘した。人類の直接の祖先であると見られており、脳の容積は850ccあった（注：現代人の脳の容量は約1,400cc）。一部はアフリカを出てアジアにも進出し、ジャワ原人や北京原人になったと言われている。

【ワンガリ・マータイ女史（ノーベル平和賞受賞者，旭日大綬章受賞者）】

●2004年，ワンガリ・マータイ女史（ケニア環境・天然資源副大臣（当時））は，長年にわたりアフリカ全域において環境保護活動（「グリーンベルト運動」と呼ばれる植林活動）を行ってきた功績が認められ，ノーベル平和賞を受賞。



●同女史はその後，京都議定書発効式典（2005年2月），愛知万博開会式（2005年3月），TICADIV（2008年5月）に出席。日本語の「もったいない」の精神に啓発され「MOTTAINAI」キャンペーンを国際的に展開し，環境保全に関する意識啓発に大きく寄与した。

●こうした功績に対し，2009年5月，我が国は旭日大綬章を叙勲した。

●2011年9月に逝去。

【ケニア料理】

- ケニアの代表的な主食はウガリと呼ばれる白トウモロコシの粉を湯がいて練ったものである。食べ方は片手で団子状にし、シチュー等と一緒に食べる。
- ケニアの名物料理としては、ニヤマ・チョマ（焼き肉）がある。牛肉が多いが山羊も食べる。調理法は、焼き上がった肉の塊を細かく切り、塩をつけて食べる。
- モンバサ等の海岸地域では、シーフード（シーパーチ、伊勢エビ、カニ等）は、ライム、ココナッツ、コショウといった香辛料で調理する。



【国名ナイロビ西部環状道路（コットン・アベニュー）】

●日本の無償資金協力で整備した「ナイロビ西部環状道路」は、2013年12月に完工し、ナイロビの交通渋滞の緩和に貢献しているとともに、設計・施工の質が高いとナイロビ市民、ケニア政府から非常に高い評価を受けている。

●当該道路の一部には「コットン・アベニュー」という名称の区間がある。これは2013年3月に施工中の事故で亡くなられた施工会社NIPPOの現地事務所長であった故綿貫亨氏を偲んで命名されたもの（綿＝コットン）。ケニアでは、大統領や地名にちなんだ道路名称は散見されるものの、私人に由来するものは珍しい。



【女性が輝く社会】

●マーガレット・ケニヤッタ大統領夫人（写真：左）やレイチェル・ルト副大統領夫人（同：右）は、夫人としての活動のみならず、自らイニシアティブをとって、ケニアにおける女性の社会進出を促す活動を積極的に展開。



●マーガレット大統領夫人は、エイズ予防を始めとする母子保健向上のための支援事業「Beyond Zero Initiative」を実施し、「国際女性の日」である3月8日には「ファースト・レディ・ハーフマラソン」を開催（2015年は2回目。写真：同夫人がプリントされた大会シャツ）。マラソンの参加料は同事業の資金に充当。これまで、駐ケニア日本大使を始め館員の他、ケニアの在留邦人も多数参加。



●レイチェル副大統領夫人は、ケニア地方部に住む零細農業を営む女性を中心に、コミュニティ単位の小額共同融資活動（テーブル・バンキング）を展開。女性の経済的自立，生計向上等を支援。

●2011年3月の東日本大震災に際しては、キバキ大統領（当時）及びオディンガ首相（当時）からお見舞い状が接到したことに加え、ケニア政府から義援金100万ドルの支援があった。

【ABEイニシアティブ】

●ABEイニシアティブへのケニアからの研修生数は、アフリカ最大（総参加者数1,101名中147名：2018年3月現在）。

【躍動するケニア経済】

●M-Pesa は、携帯電話会社サファリ・コム (Safaricom) が運用している携帯電話を利用したモバイル決済サービスである。同社は、ケニアの出稼ぎ労働者による少額送金のニーズと銀行口座開設率の低さに着目し、2007年から、電話回線を利用したモバイルマネー決済 (M-PESA) やモバイル預金・借入 (M-Shwari) 等のサービスを提供を開始。現在、携帯加入者、モバイルマネー決済サービス加入者は、ともに国内シェアの約7割を占める。M-Pesa はケニアを中心として東アフリカ一帯で利用されており、「M」はモバイル、「ペサ (pesa)」はスワヒリ語でお金を意味している。利用開始手続の容易さもあり、都市部のみならず農村部にまで浸透し、代理店数は13万店舗、ムペサ上での取引額は6.9兆ケニアシリング (ケニアのGDPとほぼ同額) に達している。

【クリーン・エネルギー：地熱発電】

●グレート・リフト・バレーは地熱発電に適した土地で、同地にあるオルカリアはケニアの地熱発電の中心地。ケニアは 2030 年までに総発電量の 30% を地熱発電で賄うことを目指している。



●日本は、地熱発電分野で世界 7 割のシェアを誇る技術優位性を有し、1981 年にできたケニア初の地熱発電所オルカリア I の発電タービンを始め、オルカリア地熱発電所の複数のタービンが日本製である（オルカリア I, II, IV）。現在、オルカリア V（70MW×2基）を日本企業が整備中（2017年4月着工）。また、2018年3月にオルカリア I（15MW×3基）の改修計画（有償資金協力，供与限度額：100億7,700万円）に関する交換公文の署名が行われた。

【ブルーエコノミー会合】

●2018年11月、ケニアのナイロビで持続可能なブルーエコノミー会合が開催され、184か国・機関から、1万8千人以上が会合に参加した（日本からは佐藤外務副大臣が出席）。

●ブルーエコノミーは、海洋のみならず、河川、湖沼を含めたあらゆる水に関する資源開発、資源保全、効率的利用（インフラ整備）、環境保護、安全保障までを含む広範な概念。今回ナイロビで開催された持続可能なブルーエコノミー会合は、本分野における最初の大規模国際会議であり、日本は持続可能なブルーエコノミーを推進する重要性にかんがみ、カナダとともに同会合の共催国となった。

（了）